

幼児の環境教育に関する事例的考察：「森の幼稚園」の教育実践

著者名(日)	仙洞田 結, 山内 紀幸
雑誌名	山梨学院短期大学研究紀要
巻	31
ページ	89-100
発行年	2011
URL	http://id.nii.ac.jp/1188/00000092/

幼児の環境教育に関する事例的考察

—「森の幼稚園」の教育実践—

A Case Study on “Forest Kindergartens” in Japan

仙洞田 結^{*1}, 山内 紀幸

Yui SENDODA, Noriyuki YAMAUCHI

概要

「森の幼稚園」とは、幼児期から毎日森に出掛け、自然の中で動物や植物と直接触れ合う体験を重視する環境教育を行っている園のことをいう。こうした北欧の「森の幼稚園」を実践しようとする動きが日本でも見られてきている。本研究では、近年設立された甲信地域の3園の「森の幼稚園」を対象に、観察やインタビューを通じて「森の幼稚園」の教育実践を明らかにしていった。結果として「森という空間的広がり」「カリキュラムの柔軟性」「幼児の環境教育への示唆」の三点において、教育の特徴を見出すことができた。

I 研究の目的

「森の幼稚園」とは、幼児期から、毎日森に出掛け、自然の中で動物や植物と直接触れ合う体験をすることを基礎とする環境教育を行っている園のことをいう。

「森の幼稚園」は、1950年代半ば、デンマークの母親、エラ・フラタウ (Ell Flatau) が、自分の子どもを森の中で思い切り遊ばせてあげたいという思いから毎日森へ出掛け、それを見た近所の母親達が彼女に自分の子どもをあずけたことから始まった (東方 2005)。ドイツでは、1993年にフレンスブルクに最初の施設が設けられ、現在約350もの「森の幼稚園」が存在している (P・ヘフナー 2009)。スウェーデンにおいても、「森のムッレ教室」という自然教育プログラムが開発され、このような動きは北欧において高まっている (岡部 2007; 腰山 2001)。ヨーロッパにおける環境問題の関心の高まりとともに「森の幼稚園」の教育実践は、幼児期における一つの環境教

育の実践として注目されてきているのである。

日本において環境教育は、1960年代に生じた深刻な公害問題が、人間の生活に影響を及ぼしたことから、その重要性が注目されるようになってきた。小学校・中学校・高等学校では、現在しばしば授業の中で環境問題について学習する機会が設けられるようになってきている。

他方、幼児教育においては、身近な環境に親しみ、自然と触れ合うことを目指した保育内容の一領域として「環境」は重視されているが、環境教育といった大枠の中で保育を展開している園は少ない (井上 2004; 井上 2009; 野々山 2008)。しかし、近年、前述の北欧の「森の幼稚園」を実践しようとする動きが日本でも見られてきている。

本研究では、近年設立された甲信地域の3園の「森の幼稚園」を対象に、観察やインタビューを通じて「森の幼稚園」の教育実践を明らかにしていくことを目的とする。

^{*1} 専攻科保育専攻学生

Ⅱ 研究の方法

1 研究対象

以下の表1の通り、甲信地域にある3園を対象とした。

表1 研究対象の3園

	A園	B園	C園
設立年	2007年	2007年	2007年
所在地	山梨県南都留郡富士河口湖町	山梨県北杜市	長野県下伊那郡喬木村
形態	無認可 民間	無認可 民間	無認可 民間
スタッフ数	8名 (内幼稚園教諭3名)	4名 (内保育士1名)	3名 (内保育士2名)
幼児数	25名	27名	5名
対象年齢	3～5歳	3～5歳	3～5歳
保育時間	週5日 9:00～16:00	週4日 9:30～14:00 10:00～14:00 (冬期)	週5日 9:00～14:00

2 研究方法

以下の表2のように、計5回、デイリープログラムの観察と担当者へのインタビューを行った。

表2 研究の方法

日時	対象	観察	インタビュー
2010年5月24日	A園	デジタルカメラ、フィールドノートによる記録	実施せず
2010年6月3日	A園	デジタルカメラ、フィールドノートによる記録	対象：保育者ボイスレコーダーによる記録
2010年6月4日	B園	デジタルカメラ、フィールドノートによる記録	対象：代表者ボイスレコーダーによる記録
2010年6月21日	C園	デジタルカメラ、フィールドノートによる記録	実施せず
2010年6月28日	C園	デジタルカメラ、フィールドノートによる記録	対象：代表者、保育者ボイスレコーダーによる記録

Ⅲ 結果と考察

1 A園の「森の幼稚園」の実践


1-① 2010年5月24日 観察記録

天気 雨 活動時間：9：00～12：00 参加人数：保育者2人 園児19人

時間	森の活動	
9:45	●身支度をして森へ出発する	<ul style="list-style-type: none"> ・ 雨が降っていたため、カッパを着て森へ出発する。 ・ 幼稚園の建物のすぐ裏側が森になっている。 ・ 保育者は先頭に一人、最後尾に一人着く
9:50	●広場まで歩く	<ul style="list-style-type: none"> ・ 目的地に向かい、坂をのぼる。 ・ 広場までは上り坂となっている。 ・ 車のある場所まで行き、先頭の子どもは最後尾の子ども達が到着するのを待つ。 ・ 歩いている途中で子どもたちは様々なものを発見する。 ・ 歩いている途中で転んでも、泣かず一人できき上がってまた歩き出す。 <p>〈土に穴があいているのを見て〉 「何の動物の足跡かな」 〈大きな水溜りを発見し〉 「大きい川みたい」 〈深い水溜りを発見〉 「どの位深いのかな？」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 保育者は子どもの問いかけに対し、長い木の枝を使って水溜りの深さがどの位あるか調べる。
10:05	●広場に到着 ●好きな遊びを楽しむ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 広場に到着し、好きな遊びを楽しむ。(ブランコ、サッカー、砂遊び等) ・ 縦割り保育の、サッカーも異年齢の友達と行う。 ・ 基本的に保育者は遊びには参加せず、見守っている。 ・ 何か発見があった際には、保育者は子ども達に声を掛け、その発見を共有する。 <p>深い水溜りに入って遊ぶ。 洋服が濡れても気にせず、夢中になって遊んでいる。 水溜りの中でアメンボを発見する。 広場には太い丸太もあり、子ども達は自由に好きな遊びを楽しんでいる。</p>
11:20	●園に帰る	<ul style="list-style-type: none"> ・ 時間になり、リュックを背負って園に向かって出発する。 ・ 帰り道は下り坂で、雨の影響により滑りやすくなっているので、子ども達は気をつけながら歩く。 ・ 前と後ろの間をあけないように、間隔を詰めながら歩く。 ・ 歩いている途中で転び、手をついて、手が汚れてしまった時には、葉っぱを取って、その葉っぱで手の汚れを拭く。

1-② 2010年6月3日 観察記録

天気 晴れ 活動時間：9：00～12：00 参加人数：保育者2人 園児14人

時間	森の活動	
9:45	●身支度をして森へ出発する。	・ 身支度を整え、今日は今年初めての明光山へ出発する。
9:50	●明光山へ出発	<ul style="list-style-type: none"> ・ 目的地に向かい、坂を登ぼる。 ・ 歩いている途中で子どもたちは様々なものを発見する。 ・ 車のある場所まで行ったら、先頭の子どもは最後尾の子ども達が到着するのを待つ。 ・ 歩いている途中で転んでも、泣かずに一人で起き上がってまた歩き出す。 ・ 「この葉っぱ、レモンの匂いがするんだよ。」 ・ レモンの匂いがする葉っぱを発見する。 ・ 明光山は数あるフィールドの中で一番遠い場所にある為、途中で水分をとり、休憩をする。
10:10	●休憩	
10:05	●再び歩き出す	<ul style="list-style-type: none"> ・ 急な斜面もあり、子ども一人ひとりが自分のペースに合わせてゆっくりと斜面を降る。 ・ タンポポやシロツメクサ、マツの木などを見つける。 ・ 歩きにくいところも、楽しみながら進んでいく。
10:20	●明光山に到着	<ul style="list-style-type: none"> ・ 明光山に到着する。 ・ リュックを置いた木の下に、野ネズミを発見し、捕まえようとするが、逃げられてしまう。 ・ 木にはセミの抜け殻があった。 ・ セミの抜け殻の近くに成虫がいるのを見出し、保育者がガラスのケースに入れ、子ども達は観察をする。 ・ 木々の中には小さい木もあり、2歳の子どもも木登りをすることができる。 ・ 積極的に登って遊ぶ。 ・ 芝生のある、広い場所では、追いかっこをしたり、競争をしたりして遊ぶ。 ・ 「オオカミさん、今何時？」 ・ 保育者の呼びかけにより、「オオカミさん、今何時？」をして遊ぶ。 
11:15	●園に帰る	<ul style="list-style-type: none"> ・ 時間になり、リュックを背負って園に向かって出発する。 ・ 帰る途中で、ヘビイチゴを見つける。 ・ こうして見つけたものは、森のおみやげバックに入れて持ち帰る。 ・ 足場が安定していないところでは、保育者は年齢が低い子どもには手をとり援助する。 ・ 足だけではなく、手を使わなければ登ることが出来ないところもある。 
11:50	●園に到着	・ 園に到着し、給食の先生に「ただいま！」と挨拶。

③A園における教育実践の特徴

①の2010年5月24日の教育活動では天候は雨であったが、カッパを着て森へ出掛けるといふ、雨天での保育を見ることができた。森へ出掛ける前の森での活動場所の設定は、「今日はどこへ行くのか」といふ保育者の問いかけによつて、子ども達を中心に決めるのが通常である。だがこの日は、今までの経験上、雨の日は急斜面のある場所では危ないといふことを子どもが理解しており、広場での活動となり、サッカーや大きな水溜りて遊ぶ姿が見られた。②の2010年6月3日の教育活動は晴天で、子ども達も森に慣れてきたために一

番遠いフィールドに行った。野鼠や春蟬も発見し、植物のみならず動物とも関わる機会があることがうかがえた。この日は、木のほりや追いかかけっこを中心に遊んでいた。A園では、子どもが遊びを行っている時には保育者はできるだけ見守るといふ形をとっていた。遊んでいる子どもに対して「何をしているの?」と話かしてしまうと、子どもの遊びが中断されてしまうからだといふ述べていた。また、A園では午前中は屋外活動、午後はモンテッソーリ教育を行うといふプログラムが展開されていた。




2 B園の「森の幼稚園」の実践

2-① 2010年6月4日 観察記録

天気 晴れ 活動時間：9：30～14：00 参加人数：保育士1人 保護者3人 園児18人

時間	森の活動	
9:30	●好きな遊びをする。	<ul style="list-style-type: none"> 登園した順に、好きな遊びをして楽しむ。 梅の木があり、木に登り梅をとったりする。
10:00	●朝の会 ●活動場所を決める	<ul style="list-style-type: none"> 出席をとる。 身支度を整える。 今日の活動場所を決める。 多数決で、今日は川に行くことに決まった。
10:20 10:30	●川へ出発 ●川に到着	<ul style="list-style-type: none"> 長靴を履いて、森の中を流れる川に出発する。 川に到着し、好きな遊びをする。 カニを探す。 森の中では、様々な自然で見立て遊びが出来る。 木の根でガソリンスタンド屋さんごっこをする。 高い場所から魚釣りごっこをする。 細い木の枝を釣竿に見立てて、魚釣りごっこをする。 魚は葉っぱを使い、その他にも、葉っぱは釣竿につける餌にもなる。 釣った魚で、魚屋さんを開く。 高い場所から魚釣りをする子ども。 大物が釣れるまで頑張っている。 年少の子どもが、丸太を両足にしっかり挟んで渡っていく。 「全然怖くないよ」 長靴を履いているので、足が濡れる心配もなく、集中して遊ぶことが出来る。 全員が集合し、ピッコロに出発する。 道路を渡る際には、五感を使って、よく見て、よく聞いて、自分が大丈夫だと感じたら、渡る。
12:15	●ピッコロに出発	<ul style="list-style-type: none"> シートを敷き、昼食の準備をする。 森の神様にお祈りをする。 挨拶をして、お弁当を食べる。 食べ終わった子どもから、片付けをする。
12:30	●昼食	



13:30	●好きな遊びをする	<ul style="list-style-type: none"> ・ 小さい子どもが片付けに苦戦していたら、年上の子どもが助けてあげる。 ・ 好きな遊びをする。 ・ シャベルを使い、土を掘る。 ・ 絵本が始まるので、集合する。 ・ 当番の保護者が、絵本を読み聞かせする。 ・ 子ども達は集中して絵本を見る。 ・ 今日の活動は楽しかったか、楽しくなかったか、何をしたのか、発表をしたい子どもは発表をする。 	
13:45	●絵本		
13:50	●帰りの会		
13:55	●好きな遊びをする	<ul style="list-style-type: none"> ・ お迎えが来るまで、好きな遊びをする。 ・ ハンモック、おままごと、木登り、追いかっこ等。 ・ 順次降園する。 	
14:00	●降園		

②B園における教育実践の特徴


B園でも、A園と同様にその日の活動場所は朝の会で子ども達が中心となって決めており、この日は川へ行くことになった。川といっても森の中を流れる川であった為、川と森、両方で遊ぶ姿が見られた。また、B園では森にある木や葉っぱなどの自然物を使い、魚釣りやおままごとなどの見立て遊びを行う子どもが多く見られた。B園でも、A園と同様に保育者は基本的に見守る形をとり、喧嘩が発生した際にも仲裁に入らずにい







た。子どもが自分の頭で考えて、喧嘩も解決できるように「待って見守る保育」を行っているとのことであった。また、B園は午前・午後と一日のほとんどを野外で過ごすというプログラムであった。B園では「昔は当たり前であったことが今では当たり前でなくなっている」として、生活に根ざした保育を行うようにしているとのこと、保育者だけではなく保護者も参加して保育を行っていた。

3 C園の「森の幼稚園」の実践

3-① 2010年6月21日 観察記録

天気 晴れ 活動時間：9：00～15：30 参加人数：保育士1人 保護者2人 園児5人

時間	森の活動		
9:00	●当園	<ul style="list-style-type: none"> ・ 順次登園する。 ・ はしごにのぼり、桑の実を食べる。 	
9:30	●好きな遊びをする	<ul style="list-style-type: none"> ・ 砂遊びをする。 ・ おままごとの容器の中に砂を入れ、その上に採ったお花を敷き詰める。 ・ 小麦粉クッキーを作る。 ・ 保育者と一緒に、小麦粉と水を混ぜて丸く形づくり、フライパンに油を敷き、作ったクッキーを並べる。 ・ 火を熾して、クッキーの生地を焼く。 ・ 息を吹きかけながら、クッキーを焼く。 	
10:00	●小麦粉クッキー作り		

<p>12:30</p>	<p>●昼食</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 葉っぱを肉に見立てBBQ ごっこをする。表を焼き終えたら、裏返しにして、両面を焼く。 ・ 尺取虫を発見し、手のひらに乗せる。 ・ 小人小屋の窓の近くに尺取虫を置き、その上に葉っぱをかけてあげる。 ・ 葉っぱを口に当てて音を出す。 ・ お菓子屋さんごっこの為に、必要なものを集める。 ・ キノコを発見する。 ・ 「でも、毒キノコかも知れないから触らないほうが良いよ。」 ・ 川に架けてある橋に葉っぱなどを並べ、お菓子屋さんごっこを始める。 ・ 川でお昼ご飯を食べる。 ・ 挨拶をする。 ・ 子ども達のお弁当はおにぎり弁当でお母さんの愛情たっぷり。 	
<p>13:00</p>	<p>●好きな遊びを行う</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ ネットを持ち、生き物を探しに行く。 ・ 魚を捕まえる ・ 魚を発見し、網で捕まえる。 ・ 「このままだと死んじゃうから、水の中に入れよう」 ・ 川の中に石を使って壁を作り、その中に捕まえた魚を入れる。 ・ 恐竜の頭を探しに森の中へ。 ・ 急斜面もどんだんのぼって行く。 ・ 恐竜の頭になる石を見つける。 ・ 森で見つけた石を使い、恐竜を完成させる。 ・ ビオトープの池の中に草を入れて鳥を作る。 ・ 「トノサマガエルがのぼれるようにするの」 ・ 他の子ども達も協力して草を入れ、鳥を作る。 ・ 皆、池の中に入り、生き物を探したりして自由に遊ぶ。 ・ 降園の時間が近づき、川で体を洗い、着替えをする。 	
			
			
			
<p>14:30</p>	<p>●絵本の読み聞かせ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 当番の保育者が読み聞かせる絵本を聞く。 <p>〈絵本〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ かさこじぞう ・ 熟語の絵本 	
<p>15:00</p>	<p>●おやつ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 午前中に小麦粉で作ったクッキーと保護者の方が持ってきてくれたくあんと煮物をおやつに食べる。 	
<p>15:30</p>	<p>●降園</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ お迎えが来た子どもから、順次降園をする。 ・ 帰り際に滑り台で遊んだりしながら降園する。 	

③ C園における教育実践の特徴

C園もB園と同様に保育者と保護者が一緒になって保育を行っていた。また、①の2010年6月21日には小麦粉クッキー、②の2010年6月28日には野菜のお味噌汁を作るなどの活動があり、火を熾すことも自分達の手で行い、野外料理を行うなどの活動も見られた。また、C園においては園舎がなく、小川や池、原っぱなどもあり、様々なビオトープがある為、子ども達は毎日自分の好きなフィールドに行くことが可能であった。昼食に関しては、全員が一斉に食べるのではなく、お腹が

空いたら自分で挨拶をして食べるようになっており、一般の幼稚園とは違い、時間にゆとりがある為可能となることであると感じた。

4 インタビューを通じた「森の幼稚園」の実際

インタビューは「設立の経緯」「環境教育の概念」「月案や年間計画」「教材研究」「森での危険」「幼児の適応過程」「教育の成果」と多岐にわたったが、紙面の関係上、ここでは、「環境教育の概念」と「月案や年間計画」について記載する。

①環境教育の概念について

Q 1 「森の幼稚園」といえば環境教育が謳われていますが、「食物連鎖」などの環境教育の概念は教えているのですか。(下線：論者)	
A 園	食物連鎖については、 <u>子どもが活動を通して自然に分かっていくということですね。だからドングリとか松ぼっくりを、森のおみやげバッグ以上に欲張らないのは、餌を残していかなきゃならないということを知っているからです。</u> あとは、 <u>食育を園でやっていて、自分達で作ったり食べたりする中で、山のものも持って来て、ヨモギ団子を作ったりします。後は環境教育で、このご飯も、残さない子には、エコマークが貰えるんです。それは、沢山食べたからじゃなくて、ゴミを作らないからって言う意味であげます。</u>
B 園	「今日は食物連鎖をやります」とか、 <u>そういう形では絶対にありません。一緒に生活していてカニを獲って、「カニを飼いたい」と子どもが言って、じゃあ何カニはミミズを食べるのかというように子ども達が調べていくじゃないですか。それで、「じゃあミミズは何を食べるの?」というように、カニを獲って、それから発展していくんです。それが生活に根ざした保育ですね。私環境教育って好きではなくて、カニを捕まえて食べるとか、昔は当たり前だったじゃないですか。当たりのことを当たり前にやりたいなと思って。ここはもう森の中に入っているから、虫ともお友達になるし、四葉を食べたり。そしたら環境を壊すような大人にはならないかなって思います。</u>
C 園	食物連鎖については、小さい虫で行うこともあります。まずは肉食か、肉食ではないかというところから。例えば、カマキリがムシャムシャ食べているシーンを見て、「小さい虫を食べるんだ」とか。 <u>環境教育の導入については行っていません。子どもの感性って素晴らしくて、こちらが「空気もいい」と言わなくても子どもの方からそういった言葉が出てきます。山登りの時に、木の根っこを持ってのぼるのですが、その際に「根っこが支えてくれる」って言ったりします。木の枝は折れてしまふけれど、根っこはみずみずしくて折れないことを、子どもは知っているんです。もう詩人ですね。だから導入部分として考えていることは何にもありません。</u> <u>私が考える環境教育は「子どもに伝えること」「子どもに自然の中で思い切り遊んでもらって自然を好きになること」です。それは上辺ではなく本当の気持ちになって、それはいつか大人になって行動に出ると思っています。それは= (イコール) 未来の地球の環境保全活動に繋がっていくと思います。</u> <u>具体的な環境教育と言えば、私がスウェーデンの「ムッレ教育」のリーダーの資格を持っているので、去年は5・6歳児を対象に「ムッレ教育」というのを行い、「一つのが全て繋がっていて、循環されている」ということを教えました。ゴミを捨てないということも教えました。ゴミのことを学んだ時には、その後本当にゴミを拾うようになりましたね。でも、まずは自然に慣れ親しむことが大切で、それが環境教育のスタートではないかと思っています。</u>

<考察>

食物連鎖においては、3園とも体験を通して触れる機会はあるが、事前に説明を行うことはない

という回答結果が得られた。A園においては、「子どもが活動を通して自然に分かっていく」と述べ、B園においては「生活の中で行っている」

と述べている。また、C園においても、「小さい虫と出会った際には触れる」として、必ずしも森での活動の前に、食物連鎖などを事前に概念を教えることはないということが分かった。また、B園C園の代表者の話から、幼児期から自然に親しみ、自然を好きになることで、将来自然を壊すような大人にはならないだろうとの思いが根底にあることが分かった。幼児期における「森の幼稚園」での環境教育は、まずは自然に親しむことが基礎となっていることが分かる。

また、具体的な環境教育への取り組みとして、A園では食育を行う他に、ご飯を残さず食べる

とゴミを作らないという意味で「エコマークシール」が貰えるという活動をしていた。C園においては、保育者がスウェーデンの「ムッレ教育」のリーダー資格を有しており、具体的な環境教育を行っていることが分かった。その効果についても実施前と後では明らかに違いが分かる述べていたが、「ムッレ教育」を行うには相当な準備があると話してくれた。自然に慣れ親しむというのは3園ともに共通であったが、具体的な環境教育の取り組み様式は園ごとに異なるということが分かった。

②月案や年間計画などのねらいについて

Q 2 月案や年間計画などの保育のねらいはどうされているのですか。(下線：論者)	
B園	今の時季だと「蓬団子に向けてやりましょう」とか、「お父さんの日に向けてやりましょう」というのがそうですね。お父さん週間という計画はあって、それで蓬週間の時には蓬の本を読んだり、という感じですね。 <u>「今蓬の時季だから蓬を食べさせてあげたいな」</u> っていう自分の計画はあるのだけれど、そこに付随して、 <u>個々の子ども達の方が大事なんです</u> 。例えば、「あの子は自分もやったのに、人のことばかり言う、だからあの子をどうにかしたい」とか。色々個々に、「あの子はこうなってほしい」というのが全部あるんです。それは、計画に立てることではないです。旬のことはずっとあって、「流し素麺したい」とか、季節を感じてやって欲しいっていうのはあるんだけど、今この子は園に慣れて欲しいとか、そういうことを保育スタッフミーティングで話したりします。
C園	年間計画はあります。あとは私が出している、「みっけ流保育計画」があります。それは施設のものなのでひと月ごとではないのですけれど、保育計画は、春・夏・秋・冬で、その時の季節のものを書いていきます。私が皆さんにすごく伝えたかったのが、ここでの日常です。本当に、「 <u>ある物で十分足りているし、間に合っている</u> 」ということを感じてもらいたくて、それを作ったのですけれども、季節ごとに出して行ってみたら、とっても豊かなものがあつたので。そういうものの豊かさがそこにあるので・・・(以下、略) 私の中での計画はあるけれど、それを押し付けたりはしたくないので、ゆるやかな計画ですね。

<考察>

A園については、年間計画の話聞くことができなかったが、B園C園ともに保育者の中に計画があるということが分かった。また、2園とも季節ごとの計画はあるが、B園においては、保育計画を書き出すなどの表出的な行為はなく、C園においては保育者の手書きの季節ごとの計画があった。両園ともに保育を展開しながら計画も変化していき、保護者の意見も取り入れられていた。これは一般の幼稚園と大きく異なる点ではないかと考える。一斉活動や昼食の時間が決まっていない分、ゆるやかな時間の中での保育が可能であるようだ。

Ⅳ 総合考察

以上の考察を踏まえ、「森の幼稚園」の教育実践の特徴を以下の3点の視点から述べる。

■森という空間的広がり

A園B園C園の教育実践観察から、一般の幼稚園とは違い、「森」を教室にして保育を行っている為に、天井もなく、囲いもないその空間は、決して閉鎖的ではなく、空間に流動性があり、子どもが自由に遊び、のびのびと育っている。「森の幼稚園」は固定遊具がなく、葉っぱや木の枝、花などの自然物が遊びの題材になり、見立て遊びに関しても、一つの木の枝が釣竿になれば剣にも

なる。その為に、遊びの展開にも広がりが見られた。保育者からも「自然の蔓などが固定遊具の代わりをしているし、崖のほりもあれば川を渡ってまたのぼるといふ活動はそういうものを満たしてくれる」との声が聞かれた。遊びのための素材が多様で幅拾いという点は、「森」という空間的広がりに関連しているといえる。また、インタビュー①のB園の保育者の話からも分かるように、室内での活動に比べ、森での活動では、子ども達は心身とも発散でき、閉塞感がなく遊ぶことができることがわかる。

■カリキュラムの柔軟性

「森の幼稚園」の教育実践の特徴としてカリキュラムの柔軟性が挙げられる。「森の幼稚園」では、大まかな年間計画はあるにせよ、決まった厳格なカリキュラムがない為に日々の保育の中で様々なカリキュラムを組みやすい。例えば、観察記録①2010年6月21日のC園においては、午前中に小麦粉クッキー作りを行ったが、この計画は事前に組まれたものではなく、急遽、当日に実践されたものであった。この他にも、遊びの中で子ども達から「これやりたい!」と意見が出たものを、すぐに保育に反映することができる。このように、「森の幼稚園」の時間的流動性が、柔軟なカリキュラムを可能にすることができると言える。また、B園C園に関しては、給食がなく、子どもが毎日からお弁当を持参してくる為に昼食の時間が決まっていない。その為に時間を気にすることなく思い切り遊ぶことができる。C園の保護者も「子どもが夢中になって遊べる空間がここにはある」と述べていた。「森の幼稚園」の時間的流動性は、柔軟なカリキュラムを可能とするだけでなく、子どもが「思い切り遊ぶ」ことができる空間の確保にも繋がると思われる。

■幼児の環境教育への示唆

最後に、3園の「森の幼稚園」の教育実践から、幼児の環境教育への示唆について述べる。幼児期における日本の環境教育といえば、魚やウサギの飼育や、ミニトマトやナスなどを栽培して、子どもが収穫をすることができる「プチ農園」などが主流である。しかし、3園の「森の幼稚園」

の教育実践から、ヨーロッパにおける環境教育と日本の環境教育とは考え方に違いがあると感じた。「森の幼稚園」は人の手が入り込んでいない自然の中で、子ども達がのびのびと生活していた。生き物に触れるといっても、イモリやトンボなど、飼育されていない生き物であった。また、環境教育の概念についてのインタビューからも分かる通り、A園はエコマークシールの取り組みをしており、C園ではスウェーデンの環境教育実践を行うなどもあったが、B園については具体的な環境教育を行っているわけでもなかった。また、3園ともに環境教育を前向きに行っているのではなく、保育者も「幼児期はまず、自然と親しみ、自然を好きになることが大切である」と述べている。森は楽しいだけではなく、厳しさ、苦しさ、怖さも教えてくれる。そのような環境の中で、幼児期に森での生活を通して感じたことは子ども達の中に残り、将来自然を壊すような大人にはならないだろうとの考えであった。幼児期においては、まずは「自然を好きになること」が環境教育へのスタートなのである。幼児教育における環境教育のあり方を考えるとき、「森の幼稚園」の活動は、日本の幼児教育に多くの示唆を与えてくれているように思う。

<文献一覧>

- 井上美智子「幼児期の環境教育普及にむけての課題の分析と展望」『環境教育』2004年、3-14頁。
- 井上美智子「幼児期の環境教育をめぐる背景と課題」『環境教育』2009年、95-98頁。
- 岡部 翠編『幼児のための環境教育：スウェーデンからの贈り物「森のムッレ教室」』新評社、2007年。
- 腰山 豊「幼児の環境教育についての実践研究(2)：スウェーデンにおける自然保育の実際」『聖園学園短期大学研究紀要』第31号、2001年、25-42頁。
- 東方真理子「幼児期における自然とかかわることの意味：『森の幼稚園』の教育と『環境教育』」『恵泉アカデミア』恵泉女学園大学、2005年、86-107頁。
- 野々山智氏「環境教育の基礎の育成に関する研究：幼児教育の視点から」2008年、105-112頁。

P・ヘフナー（佐藤 竺訳）『ドイツの自然・森の幼稚園：就学前教育における正規の幼稚園の代替物』公人社，2009年。

付記 本研究は，平成22年度大学評価・学位授与機構提出論文に，加筆修正をおこなったものである。